

教 育 研 究 業 績		
氏名 中村 萌 学位 修士(家政学)		
研 究 分 野		研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
保育学 幼児教育学		子ども、保育者、保育実践、共主体、
主要担当授業科目	保育の計画と評価、教育実習指導Ⅰ、教育実習指導Ⅱ、保育実習指導Ⅰ（保育所）、保育実習指導Ⅰ（施設）	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例 1) 東京立正短期大学 特別講師 「新任保育者の働きと課題」	平成 23 年 10 月	就職を控えた 2 年生を対象に、新任保育者としての働きの中で感じている楽しさや苦労について保育現場の具体的なエピソードを交えて講義を行った。そして、実際に保育現場の子どもたちと楽しんでいる遊びを学生たちと行い、その遊びによって育まれる力や想定される子どもの動きなどをグループディスカッションを通して学生が仲間と共に考える取り組みを行った。
2) 大妻女子大学 特別講師 「教育実習指導」ゲストスピーカー	平成 25 年 11 月	本実習を目前に控えた 3 年生を対象に、実習時に配慮すべき点や部分実習で活用できる手遊びや読み聞かせの仕方など、具体的な実演も交えて講義を行った。
3) 東京福祉大学 特別講師 「保育キャリア応用演習」	平成 30 年 6 月 18 日	「保育における教材とは何か」をテーマに、子どもが実際にどのようなものを教材として遊びに用いているか、また子どもの発達に即して保育者たちがどのような教材を準備しているのかについて、具体的な保育現場の写真を提示した。その後、家庭にもある身近な教材（新聞紙や紙皿、紙コップ、ストロー）を使って、子ども（対象年齢を想定し）がどのように遊びを展開していくか実際に手を動かしながらグループワークを行った。
4) 十文字学園女子大学 特別講師 「乳児保育」	令和 2 年 1 月 24 日	「乳児が育つ場と子育て支援」をテーマに子育て家庭の一日の生活を表で記し、具体的な子育てエピソードを踏まえて講義を行った。講義後はグループディスカッションを行い、そこで学生から挙げた質問に答えるかたちで学びを深めていった。また、子育て支援の視点から、保護者支援において配慮すべき事柄を、保護者との関係性ごと（担任保育者や子育て支援員など）に整理をして講義を行った。
5) 東京成徳大学「子どもの生活と遊び特論」	令和元年 9 月	4 年生の選択科目（演習）であるため、これまで学習してきた理論を実践へと結びつけていくことを意識して授業展開を行っている。特に、小麦粉粘土と片栗粉粘土づくりの授業では、粘土＝何かをつくるためのものという先入観から抜け出すべく、水の量によって変化する感触の違いを学生たちは実験的に味わい、その素材の性質や魅力に気付くこと（教材研究）を行った。そして、その保育教材を子どもの育ちや興味関心とかけ合わせて実践へと繋げるために必要となる指導計画の作成を、連続した授業のなかで取り組んだ。
6) 浦和大学「保育内容（言葉）」	令和 5 年 9 月	令和 4 年 4 月より 4 年生の幼稚園教育実習指導（応用）に関わり、学生たちが「子どものごっこ遊びに入れない」と悩んでいたことがヒントになり、「役になりきる」面白さを経験するためにペープサートを用いた即興劇を考え、まずは学生同士でごっこ遊びを楽しむという授業を行った。その後、ごっこ遊びにおける言葉の育ちについて学習した。
7) 東京家政大学「カリキュラム論」	令和 6 年	保育の計画を作成するために、子どもの具体的な姿を予測

	4 月	することを目的とし、まずは子ども目線になって豊かな自然に恵まれている家政大学のキャンパス内を「フィールドビンゴ（自然観察）」で遊び、その経験を踏まえて指導計画の作成を行った。
2 作成した教科書、教材 <教科書> 1) 『新・保育内容総論 - 保育って、おもしろい - 』教育情報出版 2) 『新・保育の計画と評価 - 理論と実践をつなぐ保育カリキュラム論 - 』教育情報出版 <教材> 1) 「子どもの遊び」をテーマに 0 歳～5 歳児の“小麦粉粘土”の楽しみの違いを探るワークシート 2) 書くこと、聞くことだけではない「ことば」を捉えるためのワークシート 3) 子どもの育ちを促す「関わり（言葉がけ）」と子どもの育ちを伝えるための「言葉づかい」の違いを捉えるワークシート 4) 子どもの姿を具体的に予測し、指導計画を作成するためのワークシート	令和 4 年 8 月 1 日 令和 5 年 7 月 1 日	（担当部分概要）第 3 章 2 節「3 歳未満児の生活をどう捉え、保育をどう実践するか」3 歳未満児の生活を具体的にイメージし、5 領域との繋がりや、保育者が日常的にどのようなことを意識し保育実践をしているか事例を通して示した。（pp.44～pp.48） 第 7 章 2 節「外国にルーツのある子どもの保育をどう捉え、どう実践するか」1 組の親子に焦点をあて、時間の経過とともに変化が読みとれる事例を示し、そこに保育者のどのような関わりや配慮があるかを示した。（pp.108～pp.112）（全体ページ） 166 ページ 編著者:前田和代 著者:鈴木えり子 浅木徹 紺谷遼太郎 鹿野千景 本村真弓 中村萌 菅野良美 室井佑美 福澤淳也 近藤真理子 須藤麻紀 新川朋子 榊原久子 馬場住子 角野雅彦 （担当部分概要）第 4 章 5 節「そのほかの計画について学ぼう」個別指導計画、食育計画、健康・安全計画を提示し、さまざまな立場の職員が連携して計画が立てられていることや、そのほかの計画と保育実践の繋がりについて事例を通して示した。（pp.126～pp.135）（全体ページ） 166 ページ 編著者:前田和代 著者:平澤順子 春原淑雄 吉田貴子 安部高太郎 上田陽子 小林美花 三島秀晃 石戸奈緒美 久米裕紀子 舟生直美 石見容子 相楽真樹子 浅井拓久也 菊池大介 中村萌 川俣美砂子 五十嵐沙織 （担当部分概要）第 6 章「パネルシアターを活用しよう」 東京成徳大学（科目：子どもの生活と遊び）において、小麦粉粘土づくりの体験学習を通して、子どもの発達に応じた楽しみ方の違いについてグループディスカッションを行い、年齢（発達）ごとに整理するためのワークシートを作成した。 彰栄保育福祉専門学校（科目：言葉指導法）において、子どもが発する「言葉」に含まれるさまざまな意味合い、また言葉にならない「ことば」を読み取るための視点をもつことを目的としたワークシートを作成した。 浦和大学（科目：保育内容（言葉））において、学生たちが自身の幼少期を振り返り、そのエピソードを基に「保育者」としての「関わり（言葉がけ）」と、「保護者」に向けて子どもの育ちを伝える際の「言葉づかい」の違いを捉えることを目的としたワークシートを作成した。 東京家政大学（カリキュラム論）において、今の季節に目を向けること、子どもの姿を具体的に予測することを目的とし、学内の自然観察フィールドビンゴを行った。そして、その経験を指導計画へと落とし込むためのワークシートを作成した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価		

1) 授業評価アンケート 東京成徳大学こども学部こども学科 「子どもの生活と遊び特論」 (選択科目・4年生)	令和2年度後期	(履修者 69 名) コロナ渦での遠隔授業となり、試行錯誤しながらの授業進行となった。授業評価アンケートでは大学平均を下回る項目が多く課題が残った。熱心に授業へ取り組んだ学生の割合 (Q11) に比べ、授業理解度 (Q16) が低い傾向にあり、教員の情報提示・課題提示の仕方 (Q13) に改善が必要だと理解した。
	令和3年度前期	(履修者 66 名) 昨年度の課題を受け、遠隔授業の工夫について他の教員から助言をもらうなどして授業の情報提示・課題提示の仕方を意識して改善していった。授業評価アンケートでは、課題となっていた項目 (Q13・16) で、9 割以上の学生が「わかりやすかった」「ある程度わかりやすかった」と回答しており、授業改善が学生にとってよい方向に進んだと捉えることができた。
	令和4年度前期	(履修者 16 名) 基本的には対面での授業に戻り、グループディスカッションやディベートなど、学生たちが意見交換できる状況をできるだけつくるよう授業を展開していった。授業評価アンケートでは、どの項目も 3.7 以上の回答となった。引き続き学生の興味関心に則した授業展開ができるよう努めたい。
	令和5年度前期	(履修者 12 名) 授業評価アンケートは履修者 16 名以上の授業が対象となるため実施なし
	令和2年度後期	2 クラス (履修者 27 名、10 名) クラスによって、予習・復習などの意欲に差が見られた。すべてオンデマンド授業で実施したため、グループワークや学生同士意見交換ができる機会の提供が課題となった。
東京家政大学短期大学部保育科 「保育実践実技 D 乳児の遊び」(選択科目・2年生)	令和3年度後期	2 クラス (履修者 19 名、27 名) 昨年度に引き続き、すべてオンデマンド授業での実施となった。授業アンケートの項目が変更されたことで、昨年度との比較ができないが、どちらのクラスも平均を下回る項目はなかった。しかし、回答率がどちらのクラスも半数以下となってしまったことは残念ではあった。オンライン上での呼びかけの工夫が必要だと感じた。
	令和4年度後期	3 クラス (履修者 12 名、21 名、19 名) すべて対面での授業実施となり、学生たちの考えを引き出しながら授業展開を意識することを心がけた。しかし、授業評価アンケートの自由記述のなかには、そのことに対する不安感や教員の受け答えに不快感を覚えた学生がいたことが分かった。改めて、授業内で学生の意見を取り上げる際は配慮が必要だと感じた。
	令和5年度後期	3 クラス (履修者 31 名、33 名、25 名) どのクラスもすべての項目において平均を上回る結果となった。自由記述のなかには、手作りおもちゃづくりやわらべうたの実践など、実技に対して好意的な意見が多く挙がっていた。引き続き、学生の学習意欲が高まるような授業展開を心がけていきたい。
	令和5年度前期	(履修者 26 名) 学科や学年の異なる学生が履修をしていたので、グループワークなどでは、さまざまな立場の学生が交流できるよう意図的にメンバーを構成するなど工夫をした。授業評価アンケートでは、教員の話し方や説明の仕方、学生の授業への興味関心などは平均を上回る結果となったが、専門知識や技術が身についたという項目では、やや低い結果となった。この結果の関連について考える必要があると感じた。
	令和5年	
浦和大学こども学部こども学科・学校教育学科 「児童文化」 (選択科目・2、3、4年生)		

浦和大学こども学部こども学科・学校教育学科 「保育内容（言葉）」 （保育士、幼稚園教諭必修・1年生）	度後期	2 クラス（履修者 22 名、26 名） どちらのクラスもすべての項目において、平均を上回る結果となった。特に、授業内に配布したプリントは学生の理解の一助となったようで、好意的な意見が多く見られた。引き続き、学生の習熟度に応じた授業展開を心がけていきたい。
4 実務の経験を有する者についての 特記事項 1) 認定こども園母の会 木の家(幼稚園部分) 2) 認定こども園母の会（子育て支援・乳幼児における研修サポート） 乳児保育・幼児保育におけるドキュメンテーションの作成・サポート 園庭開放・子育て相談員 乳児保育・幼児保育におけるドキュメンテーションの作成・サポート兼園内研修のコーディネーター 3) 認定こども園母の会（保護者勉強会講師） 「写真を通して園生活を知ろう」 「子どもの夏の生活」	平成 22 年 4 月～平成 29 年 3 月 平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月 平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月 平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月 平成 30 年 5 月 31 日 平成 30 年 9 月 20 日 令和 5 年	認定こども園の保育教諭として異年齢（3、4、5 歳児）のグループ担任、各学年のクラス担任を経験した。また、地域の子育て家庭に向けて開いた園庭開放で行う「おはなし会」の担当や延長保育における責任者など、さまざまな立場で実践に関わった。 平成 27 年 8 月～平成 28 年 8 月は、産前産後休暇・育児休暇を取得。 乳児と幼児の遊びの没頭をテーマに、週に一度の頻度で「遊びにおける子どもの夢中度とそれを支える保育者の援助」を視点に遊び場面の写真撮影を行った。そして、保育者たちと写真を通してその日の振り返りを行い、子ども理解の新しい視点を共に模索していった。また、保護者向けにドキュメンテーションの作成・掲示を行い、子どもの育ちをさまざまな立場の大人たちが知り、考え合うきっかけづくりを行った。 毎週火曜（9 時から 11 時 30 分）に行う、未就園児とその保護者を対象にした園庭開放を担当した。子育て支援員という立場で、子育ての悩みや不安に耳を傾け、具体的なアドバイスを行った。また、乳児の育ちや遊び・生活など、子育てに関する本を読み合う「おとなの読書タイム（毎週火曜 11 時～11 時 30 分）」を行い、保護者間で子育ての情報交換・共有ができる場づくりを設定した。 昨年度から引き続き、週に一度の頻度でドキュメンテーションを通した保育の振り返りを保育者たちと行った。特に、乳児の担当保育者たちは乳児の言動や遊びからその子の育ちや気持ちを読み取ることに困難さを感じていた。そのため、必要に応じて保育場面のビデオ撮影をし、乳児の遊びとそれを支える保育者の援助について具体的な保育実践を読み解くかたちで理解を深めていった。乳児の担当者たちにおける学びや課題は園内研修というかたちで園全体に共有する機会を設け、子ども園全体で保育の質の向上を目指していった。 こども園に通う全保護者を対象（自由参加）に講義を行った。園内で撮影した乳児の遊び・幼児の遊び場面の写真を学期ごとに示し、遊びの中で育まれた力について具体的なエピソードを交えて解説した。講義後は子どもの遊び・それを支える大人たちの役割について、質疑の時間を設け、保護者間でも意見交換ができるよう会を進めた。 こども園では、一学期の終了日から夏休みを迎え家庭で過ごす時間が増える一号園児と、引き続き園生活を送る二号三号園児がいる。それぞれの夏の生活について知り合うこと、そして夏の遊びの中で育まれる子どもたちの力について講義を行った。その後、夏ならではの子どもの遊びと子どもの健康を支える大人の配慮（熱中症対策や一日中冷房がきいた室内での生活など）について少人数のグループディスカッションを行い情報交換をした。 相談依頼のあった園へ訪問し、相談内容に応じてカンフ

4) さいたま市幼児教育アドバイザー		4月～現在に至る	アレンスや、テーマを定めて研修を行なうなど、質の高い教育・保育を地域に広げていくための役割を担っている。	
5 その他				
__特になし				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項		年月日	概要	
1 資格，免許				
保育士資格		平成 20 年 月	(埼玉県 - 042175)	
幼稚園教諭 1 種免許状		平成 20 年 月	(東京都 平 19 幼一 第 1 1 4 1 4 号)	
幼稚園教諭専修免許状		平成 22 年 3 月	(東京都 平 21 幼専 第 28 号)	
2 特許等			----	
__特になし				
3 実務の経験を有する者についての 特記事項				
__特になし				
4 その他				
__特になし				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書，学術論文等の名称		単著・共 著の別	発行又は発 表の年月	発行所，発表雑 誌等又は発表 学会等の名称
(著書)				
1:新・保育内容総論 - 保育って，おもしろい - (再掲).. 				

(学術論文) 1 園内研修に継続的に関わる研究者の意味とは何か 2 園内研修に継続的に関わる研究者の意味とは何か 3 幼稚園と保育園の子どもが生活の場を共にするとは - それを支える大人の役割 - 4: 子どもの言葉を「聴く」ということ - 子どもと保育者が互いに学び、ともに成長しあう「共主体」の可能性 -	単著 単著 単著 共著	平成 22 年 3 月 平成 23 年 3 月 平成 26 年 9 月 令和 6 年 3 月 8 日	大妻女子大学 家政学研究科児童学専攻 修士論文 大妻女子大学 家政系研究紀要第 47 号, 保育の実践と研究第 19 巻第 2 号「特集：子どもたちの園生活」, スペース新社保育研究室 彰栄保育福祉専門学校研究紀要 39	対象園での園内研修（研究者を招いて月に一度実施）に一年間同行し、そこでの研究者の役割を保育者たちとの会話データを基に分析した。その結果、単発的な研究者の関わりでは、保育者の学びと研究者の意図にズレが生じている可能性があること、また保育者の学びを促すためには研究者の継続的な関わりでなければ難しい点があることが明らかになった。 修士論文の内容を要約したものである。 pp.177 - 179. 認定こども園における子どもの一日の生活と、それに伴う保育者の連携について、時間軸で整理し、現状の課題も明らかにした。 pp.23 - 33. 異年齢保育における、集団での活動を進行していく過程に着目し、子どもの言葉をどのように集団活動へ取り入れながら保育が展開されたのか、そこには子どもと保育者の主体性がどのように入り混じって存在しているのかを、担任保育者の保育記録とインタビューより明らかにした。 中村萌・青木加奈 pp.21 - 32.
(その他) 1「継続的に園内研修に関わる研究者の意味とは何か - 保育者が挙げる保育の課題と研究者の問題意識の共有化過程に着目して -」.. 2「ドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスの取り組み - 写真を介した話し合いによる幼児理解の広がり」と深まり...」.. 3<実践報告書> 1)「おはなしのかい」 2)「私にとっての祈り」 3)「言葉に頼った保育を振り返る」 4)「保育者の連携 - 私にとって連携とは -」	単独 共同	平成 22 年 5 月 22 日 平成 28 年 8 月 19 日 平成 23 年 5 月 1 日 平成 24 年 5 月 1 日 平成 25 年 5 月 10 日 平成 26 年 5 月 10 日	日本保育学会第 63 回大会 ポスター発表 (松山東雲女子大学・松山東雲短期大学) 第7回幼児教育実践学会 口頭発表 (東京家政大学) ねんりん第 19 号 (認定こども園母の会) ねんりん第 20 号 (認定こども園母の会) ねんりん第 21 号 (認定こども園母の会) ねんりん第 22 号 (認定こども園母の会)	園内研修に継続的に研究者が関わる過程で、保育者の学びと研究者の意図が共有されていく過程を、園内研修における会話データより明らかにした。 写真を活用したドキュメンテーションおよびそれを用いた保育カンファレンスによる幼児理解のあり方について検討した。 共同発表者：中村萌・高橋健介・澤田ゆい 月に一度、土曜日の園庭開放にて地域の親子を対象に行った「おはなしのかい」を一年間担当した。企画のテーマや実践において工夫した点、また担当しての学びや反省について記した。 Pp. 60-pp. 62 キリスト教保育について学びはじめて 2 年が経ち、日々の保育で子どもたちが純粋な気持ちを祈りにのせて表現している姿から多くのことを学んだ。キリスト教保育と自身の向き合い方について考察した。 pp. 66-pp. 67 自身の保育実践を「言葉」をテーマに振り返った。はじめて担任をした年少組の子どもたちとの日々の中で気づかされた、自分自身の言葉かけの多さ、言葉で物事を動かそうとしてしまうことや、子どもの気持ちを代弁したつもりがその子の気持ちや言葉を封じ込めてしまっていたことなど、具体的な事例を挙げて一年間の保育を振り返った。 pp. 18-p. 19 こども園で働きはじめて 4 年目になり、一緒に保育を行っている先生方との連携について意識するようになる。「保育者の連携」という聞きなれた言葉の詳細を自身の保育実践を踏まえて考察した。 pp. 21-pp. 22

5)「生活にいきる木工」	平成 27 年 5 月 10 日	ねんりん第 23 号 (認定こども園 母の会)	幼児を対象に行っている延長・預かり保育の活動 報告。担当した木工活動と、曜日ごとの活動サポ ートについて記した。 pp. 58-pp. 60
6)「乳幼児の枠を超えて保育の質を深 める - つながる保育～子どもと大人、 大人と大人 - 」	平成 29 年 5 月	ねんりん第 25 号 (認定こども園 母の会)	一年を通して取り組んだ園内研修(議題発案者の 立場から)の記録と、そこでの学びや反省を記し た。 pp. 9-pp. 12
7)「週一で見る母の会の保育」	平成 30 年 8 月	ねんりん第 26 号 (認定こども園 母の会)	乳児の遊び・幼児の遊びを写真を通して伝える (ドキュメンテーションの作成)ことでの気づき を記した。特に、その日の保育の写真を掲示する ことにより保育者間で自然と振り返りが行われ たり、思わぬかたちで保護者とつながる機会にな ったり、また子ども自身が写真を通して改めて仲 間と繋がっていく姿など、それぞれの立場で深ま る子ども理解について考察した。 pp. 60-pp. 61
8)「保育を見つめる～ドキュメンテー ション作成をきっかけに」	令和元年 9 月	ねんりん第 27 号 (認定こども園 母の会)	昨年から引き続き、担任保育者たちと協力して 取り組んだ、乳児の遊び・幼児の遊びのドキュメ ンテーション作成から、保育の質の向上を目指し て取り組んだ園内研修における反省と今度の課 題について整理、考察した。 pp. 24-pp. 26
:			

(注) 「研究業績等に関する事項」には、書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。